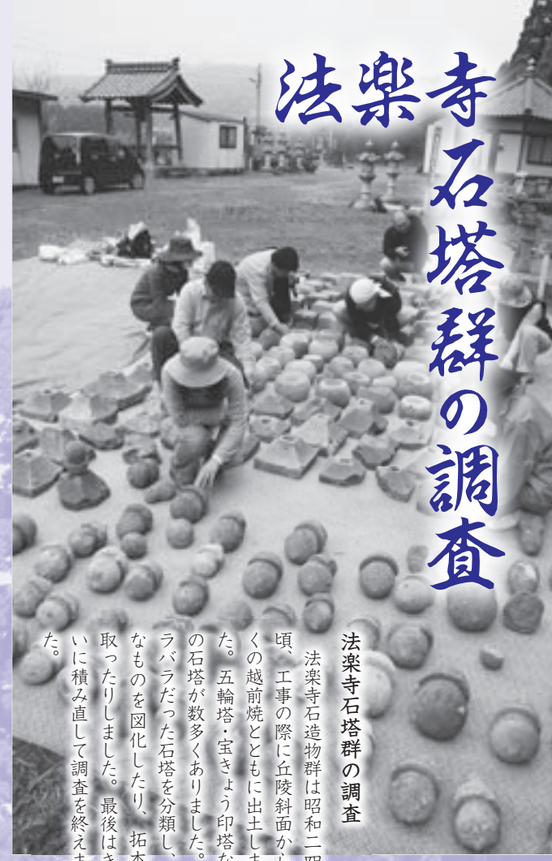
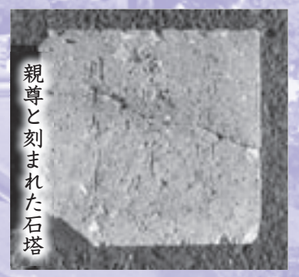
織田親真（ちかざね）の謎を追う

法楽寺石塔群の調査



法楽寺石塔群の調査

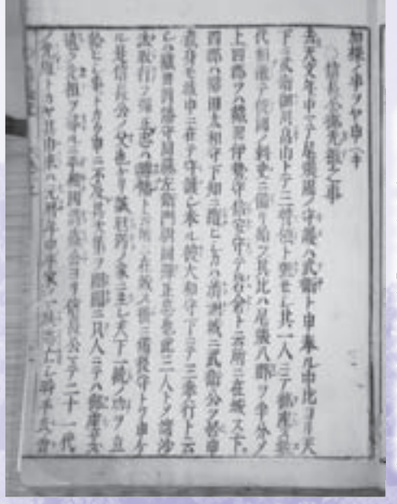
法楽寺石造物群は昭和二四年頃、工事の際に丘陵斜面から多くの越前焼とともに出土しました。五輪塔・宝きょう印塔などの石塔が数多くありました。バラバラだった石塔を分類し、主なものを図化したり、拓本を取ったりしました。最後はきれいに積み直して調査を終えました。



親尊と刻まれた石塔

（尊）
喪親真阿聖霊
正應三年庚刀二
月十九日未尅

石塔の側面には「喪親真阿聖霊／正應三年庚刀二／月十九日未尅」と刻まれています。親尊という人物が一二九〇年二月十九日の午後二時頃に亡くなったことがわかりました。ただ、普通に見ると、親真と読むことができ、実際多くの人が親真と読んできました。これまで親真と読まれていたとすると、織田氏系図に出てくる織田氏の始祖、親真との関係が気になるところです。

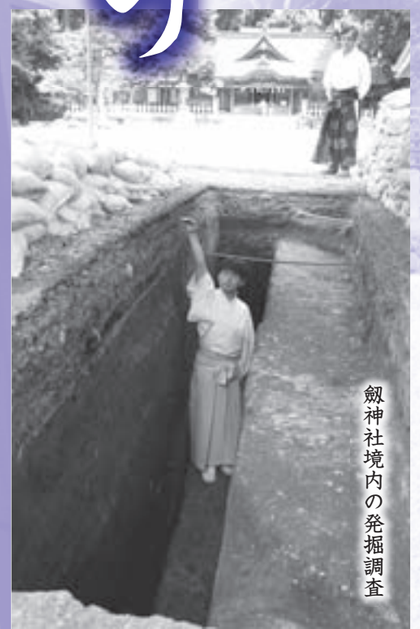


小瀬甫庵『信長記』（一六一一年頃成立）

平成二三年五月、教育委員会は文化財悉皆調査事業で、法楽寺（織田）所蔵の石造物群の調査を実施しました。

石塔群には、正應三年（一二九〇）と年号の書かれた五輪塔が含まれていました。もともとは昭和六二年、町内の郷土史家が発見、「親真」と刻まれていることから、織田氏系図・系譜に登場する「親真」ではないかと話題になりました。

調査の結果、親真ではなく、親尊という人物の墓であることがわかりました。ただ、親真と読めることから、織田氏の系図・系譜をつくる際に参考とした可能性が考えられます。



剱神社境内の発掘調査

剱神社の縁起によると、剱神社は平清盛に焼かれ、息子の重盛によって再興されたとあります。剱神社境内の発掘調査では、大規模な境内改変の痕跡が確認されました。平氏が活躍していた時期に、剱神社境内の低い箇所に土を入れて大規模に整地しているのです。年代的には重盛公の再興の時期に近いです。こうした発掘の成果を考え合わせると、縁起の記述も真実味を帯びてきます。

それでは、信長は、どう自分の出自を認識していたのでしょうか。

信長は一六歳の時に「藤原信長」と署名していますが、一五七〇年代には平氏の子孫だと名乗ったと言います。源平交代思想が根底にあったという説が有力です。源氏である足利将軍を倒すのは、平氏の信長だという考えです。

しかも当時、平重盛の子孫だと噂されています。重盛といえば、織田と関係の深い人物で、いまも剱神社に祀られています。一五七三年の越前侵攻をきっかけに剱神社との関係を深めた信長が、重盛の子孫と名乗るようになったのでしょうか。

その後、織田氏の系図がつくられていきます。具体的な物語は、小瀬甫庵による『信長記』からです。平氏の子孫であると、近江国津田（滋賀県近江八幡市）に流れ着き、剱神社に養子に入り神職を継いだことなどが出てきます。

ただ、『信長記』の信びょう性はあまり高くないことから、小瀬甫庵による創作かもしれません。しかも、親真の名前は登場しません。

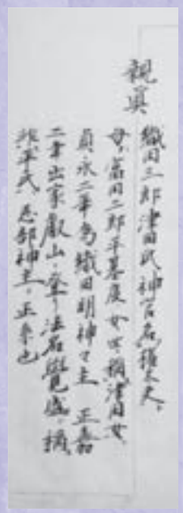
親真が最初に出てくる系譜は、林羅山が編纂した『織田信長譜』です。この時に親真の名前が確実に登場し、その後多くの系図・系譜が作られています。

これらの系図・系譜の大半は平氏につながるものですが、織田には独自の系譜が伝えられています。忌部氏系譜です。ここには親真は忌部氏の正系で、平氏との関係を否定しています。

藤原氏・平氏・忌部氏、何が真実なのでしょうか。想像がふくらみます。

剱神社境内の小松建勲神社

剱神社の境内には小松建勲神社が存在し、平重盛公と織田信長公が祀られています。剱神社には信長との関係を示す古文書が残っています。信長は剱神社と平重盛の関係を知り、数ある平氏のなかでも、重盛の子孫だと名乗るようになったのかもしれません。



織田氏、忌部氏説の系譜

母は平基度（伊勢平氏）の娘で、忌部（斎部）親澄に嫁いで、親真を産みます。貞永二年（一二三三）織田明神の神主となり、法名を覚盛と称しました。正元二年（一二六〇）二月一八日に亡くなります。興味深いのは「平氏にあらず、忌部神主の正系（正統）なり」とあることです。母が平氏の娘というだけで、平氏からの流れを否定し、あくまで忌部氏の直系だと強調しています。

織田氏、平氏説の系譜
『織田信長譜』（一六四一年成立）

平氏の貴族に最愛されし妾（おもいあ）や孤（みなしご）が近江国津田に逃れ、妾は津田の郷長に嫁ぐが、剱神社の神職が孤を見出し、剱神社を継がせます。孤は平氏の貴族の子供だとはありますが、親真という名前までは書かれていません。

小瀬甫庵の『信長記』は、太田牛一の『信長公記』を底本に創作や脚色を加えて書かれ、信びょう性は低いとされています。

三代将軍徳川家光は一六四一年、林羅山に命じて、『信長譜』を撰述、一六五八年に刊行したのが『織田信長譜』です。

平氏滅亡に際して、平資盛は子を身ごもっていた愛妾を、近江国津田に隠しました。愛妾は津田で親真を産み、津田の土豪の妻となりました。その後、織田の神職の養子となりその跡を継ぎました。

現在、年代がわかる確実な系譜として重要な史料となります。

『続群書類従』「織田系図」（一六九二年頃成立か）

親真 三郎 権大夫
江州津田。越前織田元祖。親真在胎中。及三箇月平氏没落之間。父資盛令懐胎親真之母。一族討死之時。親真之母。近江國津田庄。時銭別資盛歌和歌。自家之縁親真之母。其歌曰。
近江ナル津田ノ入江ノミチヲダシ
見ヘヌ世深キシルシナリケル。
然而令所懐親真長成後之處。長縁實子。依育之。勉渡家滅亡平氏遺孤之難。幼難。行越之前州織田之庄。於親真長成。母始聞告密々旨趣。與伴詠歌之間。修經歳月。所相續男親基也。

『続群書類従』によると、親真は通称、三郎。官位は権大夫。平資盛（平清盛の孫で、平重盛の子）とその愛妾（三井寺一条坊の阿闍梨真海の姪）の間の子とされています。

織田一族の源流を探る